

# マレーシアにおける国際看護学演習の成果と課題

## — 看護学生の視点からの分析 —

Achievements and Challenges of the Practice of

International Nursing in Malaysia

-Analysis based on Nursing Students' Perspectives-

寺尾 奈歩子・三木 佳子・梶原 恭子

Naoko TERAO, Yoshiko MIKI, Kyoko KAJIHARA

### 要旨

聖カタリナ大学看護学部看護学科では、学部学生を対象に「国際看護学演習」を開講しており、2024年には初めてマレーシアにおいて2週間の海外研修プログラムを実施した。本稿は、今後の看護学生の海外研修のあり方を検討するための基礎資料として、当該海外研修の成果と課題を明らかにすることを目的とした。本研究では、研修参加学生を対象に、研修直後にアンケート調査を実施した。その結果、学生は、異文化をもつ人々との交流、異国での生活体験、日本との保健医療制度の比較を通じて、「英語によるコミュニケーション力」「仲間と助け合う力」「生き抜く力」「挑戦する力」「自己主張する力」を獲得したことが示された。一方、課題として、看護の実際を体感する機会の確保や、英語によるコミュニケーション力向上に向けた支援の必要性が明らかとなった。

キーワード：国際看護学演習、看護学生、学習成果、アンケート調査、マレーシア

## I. 緒言

多様な人とコミュニケーションをとりながら社会課題の解決を図れる人材の育成が、「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方についての第一次提言」(内閣官房, 2022)で推奨されている。看護基礎教育においても、世界のグローバル化に伴い看護の対象が拡大している現状を踏まえ、地球規模の視点で看護を提供できる人材の育成が求められている。

聖カタリナ大学看護学部看護学科(以下、本学)は、ディプロマ・ポリシーに「国際的・学際的感覚を身につけ、変化する社会に順応し、看護を通して社会貢献するための基礎的能力を身につけている」ことを掲げ、「国際看護学」と「国際看護学演習」の2科目を開講し、国際的な視点を持つ看護人材の育成に取り組んでいる。2020年にマレーシアのマージャ大学と協力関係を締結し、海外研修プログラムを構築した。マレーシアは、多民族・多宗教国家という特徴をもつASEAN (Association of Southeast Asian Nations) 主要国のひとつである。急速な経済成長を遂げており、今後の発展が期待されている(研究開発戦略センター, 2023)。保健医療制度も日本と異なる(厚生労働省, 2019)。また、東南アジア諸国の中でも比較的治安が良いとされている(外務省, 2025)。マージャ大学は、マレーシアに所在する私立大学の一つで、医療・ヘルスケア分野を強みとする教育・研究機関である。こうした背景を踏まえ、看護学生のグローバルな視点の育成が期待できることから、マレーシアを海外研修先として選定した。新型コロナウイルスのパンデミック期間中はオンラインでの交流を継続し、2024年に本学の学生15名が現地で研修を実施した。

看護学生の海外研修に関する先行研究では、研修参加によって学生の内面的な成長や国際性の醸成、看護観の形成が促進されることが報告されている(田中, 秋元, 2021; 須藤, 樋口, 2016)。しかし、先行研究の報告は、研修先の国や研修プログラムの内容、研修期間が異なっていることから、海外研修の成果は、共通することと研修を行った国特有の成果があると推測される。現在、看護学生がマレーシアで海外研修した成果の報告は見当たらない。

そこで本研究では、マレーシアで行った海外研修の成果と課題を明らかにするために、参加学生を対象にアンケート調査を実施した。現在、看護基礎教育における国際交流活動の課題として、活動を展開できる教員や英語ができる教員の不足といった人的資源不足、不明確な交流内容や組織上の問題といった不十分なプログラム構築体制などが挙げられている(カルデナス他, 2013)。本研究は、看護基礎教育の場で海外研修を企画する教員がより具体的な方策を検討する際の資料となることが期待できる。

## II. 研究目的

本研究の目的は、マレーシアで実施した海外研修の成果と課題を学生の視点から明らかにし、今後の海外研修プログラムのあり方を検討する基礎資料を提供することである。

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 研究対象者

2024年度に「国際看護学演習」としての科目に位置づけられた、マレーシアでの海外研修（以下、研修）に参加した看護学科学生 15 名

### 2. データ収集方法

データは、学生ポータルシステム UNIVERSAL PASSPORT(ユニバーサル・パスポート) のアンケート機能を用いて収集した。回答時期は、研修終了後 1 か月以内（以下、研修直後）とした。

調査項目は、参加動機、研修参加の効果、研修の満足度、渡航前オリエンテーションの満足度、次年度以降の研修に関する意見から構成した。参加動機は、「研修費用の安さ」「マレーシア観光」「研修プログラムの内容」「マーシャ大学との人的交流」「マレーシアの文化習慣理解」「マレーシアの医療看護理解」「語学力の向上」「国際看護学演習の単位取得」8項目と自由回答の計9項目とし、「そう思う」から「そう思わない」までの5件法とした。効果は、「仲間と助け合う力」「日本人以外との交流力」「異文化への対応力」「英語でのコミュニケーション力」4項目について、「向上した」から「向上していない」までの5件法とした。さらに自由回答として「その他、向上したあるいは獲得したと思う力とその理由」および「今回の研修で最も印象に残ったこととその理由」を求めた。満足度は、プログラム全体および各プログラムの満足度を「大変満足」から「大変不満」までの5件法で求め、「本研修を後輩に勧めたいと思うかとその理由」を「はい」「いいえ」「どちらともいえない」からひとつ選択し、その理由を自由回答で求めた。渡航前オリエンテーションの満足度は、「非常に役立った」から「役に立たなかった」までの5件法で求めた。次年度以降の研修に関する意見や提案については、自由回答を求めた。

### 3. 分析方法

5件法の回答は記述統計を行い、自由回答は質的記述的に分析した。

### 4. 倫理的配慮

本研究は、聖カタリナ大学研究倫理委員会看護学科分会の承認を得て実施した（承認番号：24-09）。研究対象者に、研究参加の任意性と撤回の自由、プライバシーの保護、データの管理方法について口頭及び文書で説明を行った。

## IV. 2024 年度国際看護学演習の概要

### 1. 演習の目的および到達目標

本研修の目的は、東南アジアの国を訪れて保健・医療・福祉施設等で研修を行い、自国との違いやその国の特徴などを看護の立場でまとめ、合同でその成果についての意見交換を行うこと、意見交換を通してそれぞれの専門職者としての視野を広げ、看護における国際的感覚を養うことである。到達目標は、1) 東南アジアの国において保健・医療・福祉施設等で働く人々や学生と意見交換ができる 2) 東南アジアの国において保健・医療・福祉施設で調査を実施し実情を理解できる 3) グローバルな視点で我が国における看護について説明できるの3項目である。なお、本研修には当初 34 名が履修を希望したが、受け入れ可能人数の制約により、全員が参加することは困難であった。そこで、参加動機を英語で述べる課題を課した選抜試験を実施し、合格した 15 名が研修に参加した。

### 2. 事前学習

「国際看護学演習」は、「国際看護学」の事前履修を履修条件としている。「国際看護学」の科目では、国際看護にかかわる基本的な概念、世界の健康問題を理解し、異文化の価値観を尊重した看護について理解を深め、発展途上国における国際活動、在留外国人、在留日本人への支援等を学習している。

研修前には、海外留学経験者である教員とトラベルコンサルタントによる海外渡航時の注意点やマレーシアの基本情報などについての説明会を2回実施した。教員からは、「母語話者のように英語を話す必要はなく、英語の文法に誤りがあっても意思疎通ができれば問題ない」ことを伝えた。

### 3. 研修期間および研修内容

研修期間は、2024年9月1日から9月14日までの14日間であった。研修内容は、クアラルンプール市内の国立病院、私立病院、クリニック、高齢者施設、児童養護施設の見学、マレーシアの保健医療システムやリスクマネジメント等の講義、マーシャ大学内の医学・看護シミュレーションセンター見学、マーシャ大学学生との交流、クアラルンプール市内の視察等であった（付録1）。

## V. 結果

### 1. 参加者の概要

研修に参加した15名から同意を得た（回収率100%）。参加者の内訳は、3年生14名、4年生1名、男性2名、女性13名であった。参加者の本研修前の海外渡航の経験は、経験なし13名、あり2名であった。

## 2. 参加動機

「そう思う」と回答した人数は、「マレーシアの文化理解」が13名と最も多く、次いで「語学力の向上」12名、「マレーシアの医療看護理解」、「人的交流」が11名であった（図1）。その他、将来海外で看護師として勤務したい、初めての海外だが友人と一緒になら安心だから、海外で2週間過ごすという経験を得たいという参加動機が挙げられた。

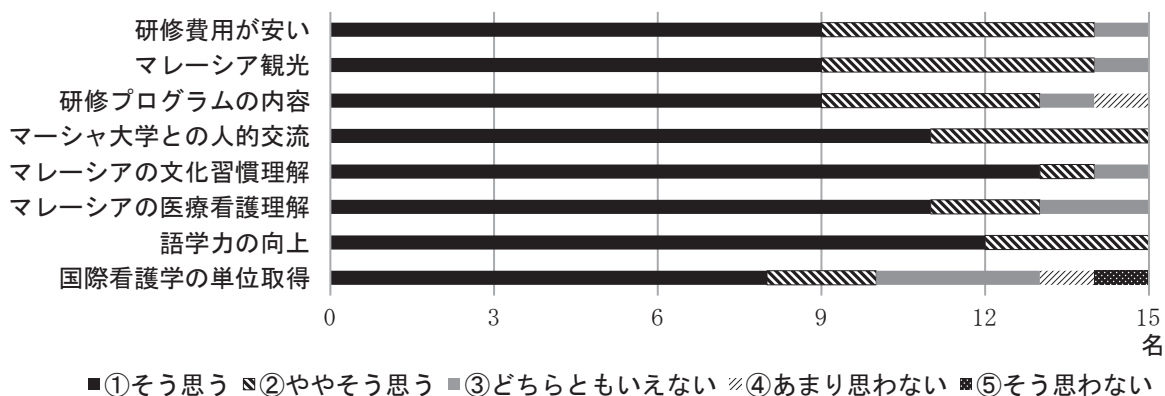


図1 参加動機

## 3. 研修の満足度

全体的な満足度は、13名が「大変満足」、2名が「満足」と回答していた。満足度が高いプログラムは、マレーシアの保健医療に関する講義、マーシャ大学の学生による静脈注射管理の講義、国立病院、私立病院見学、マーシャ病院見学、クリニック見学、クアラルンプール市内視察であった。その他のプログラムも、概ね「大変満足」、「満足」と回答していた（図2）。また、本研修で一番印象に残った

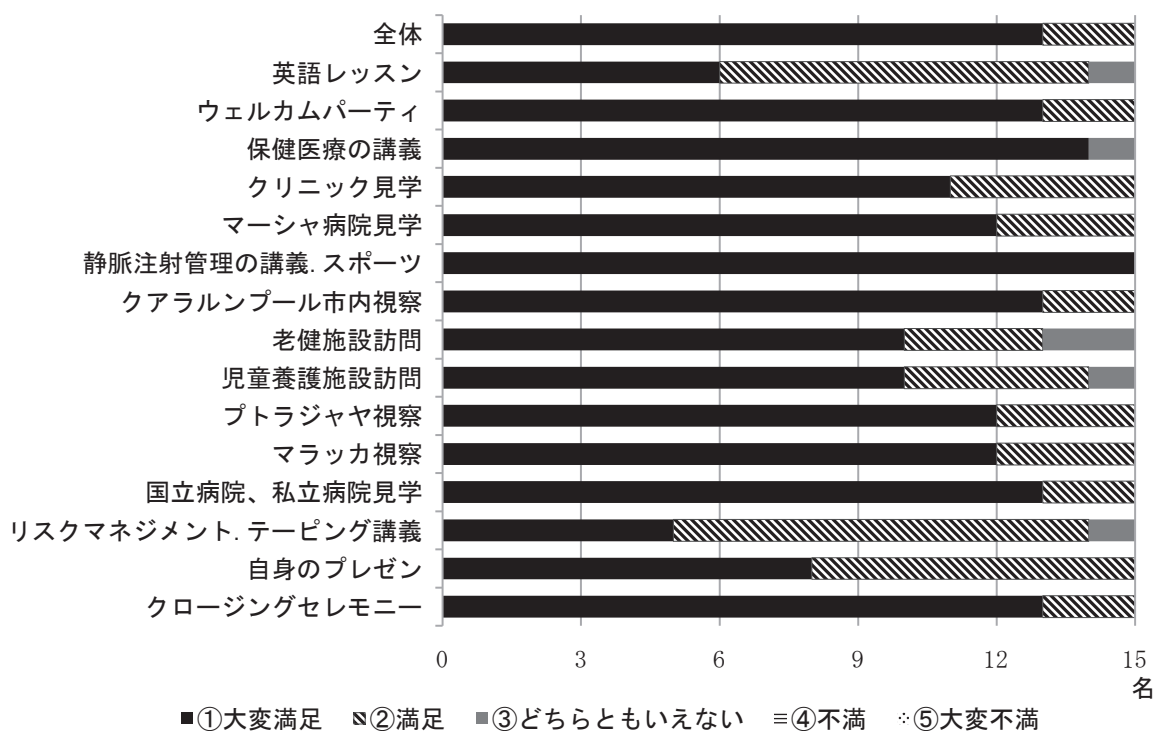


図2 研修の満足度

ことに対する自由回答では、「マレーシア人のホスピタリティや友好的な態度」と回答した学生が8名と最も多く、次いで「国立病院と私立病院の環境の違い」が3名であった。その他、日本とマレーシアの看護学生の看護実践内容の違い、マーシャ大学の充実したシミュレーションセンター、様々な人種や文化があり排他的でなく居心地がよかったといった回答があった。

#### 4. 研修参加によって獲得した力

「仲間と助け合う力」が14名と最も多く、次いで「英語でのコミュニケーション力」13名、「日本人以外との交流力」11名、「異文化への対応力」9名であった（図3）。

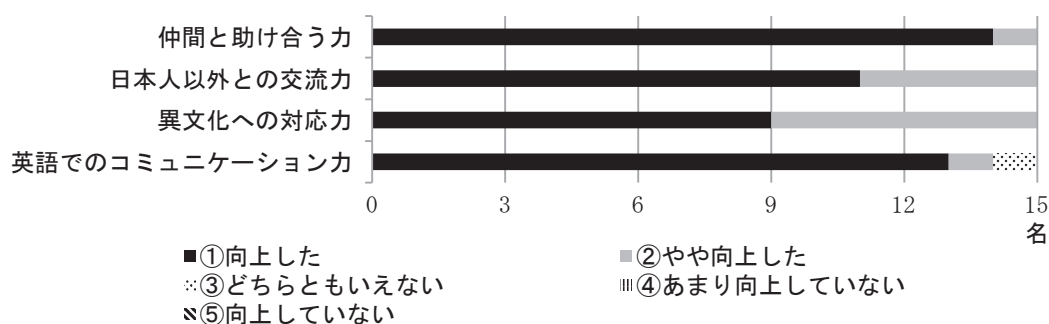


図3 研修参加によって獲得した力

自由回答では、「生き抜く力」「挑戦する力」「自己主張する力」「自己制御する力」「課題探求力」を獲得したと回答した。これらの力を獲得したと考えた理由として、「生き抜く力」は、日本とは違う環境や文化に対応しなければならぬことが多かったから、「挑戦する力」は、毎日が初めての出来事ばかりで何事もやってみるしかなかったから、「自己主張する力」は、マレーシアの食事をきっかけに自己主張できるようになって自分の考えを周りに言えることが増えたから、「自己制御する力」は、毎日友達と一緒に生活したため、その中でしないといけないことや気分の波をカバーすることが大切であることを学んだから、「課題探求力」は、国際看護の視点から他国の看護を学びたいという意欲が向上したからといった理由が挙げられた（表1）。

表1 研修参加によって獲得した力（自由回答）

獲得した力	理由
生き抜く力	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分で食料を調達したり自分や仲間の安全を守ったりしたから</li> <li>ある程度衛生環境が悪くても落ち着けるようになったから</li> <li>日本とは違う環境や文化に対応しなければならぬことが多かったから</li> </ul>
挑戦する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>毎日が初めての出来事ばかりで何事もやってみるしかなかったから</li> <li>英語で話さないと伝わらないため英語を話そうと努力したから</li> <li>言葉が伝わらなくても伝えようとする努力が重要だと感じたから</li> </ul>
自己主張する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>マレーシアの食事をきっかけに自己主張できるようになって自分の考えを周りに言えることが増えたから</li> <li>マレーシアの人たちはその時思った感情や思いを言葉にしている、伝えることが恥ずかしいと思っていた自分が、思ったことをその時に伝えないと伝わらないと感じるようになったから</li> </ul>
セルフコントロール（自己制御）する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>毎日友達と一緒に生活したため、その中で配慮しないといけないことや気分の波をカバーすることが大切であることを学んだから</li> </ul>
課題探求力	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際看護の視点から他国の看護を学びたいという意欲が向上したから</li> </ul>

## 5. 本研修の後輩への推奨度

本研修を後輩に勧めたいかという質問に対し、14名が「勧めたい」と回答し、1名が「どちらともいえない」と回答した。「勧めたい」理由として、日本と病院の仕組みが違ふし文化もかなり違うのでとても面白いと思ったから、世界規模で看護や自分の世界観を比較することで夢が広がると感じたから、一生忘れない思い出になるし海外旅行に行くことはあってもこんなに病院や大学について知る機会はないからなどが挙げられた。「どちらともいえない」と回答した理由は、とても良い経験になったと思うが、衛生面・食事が合わなくてとてもしんどかったからであった。

## 6. 渡航前オリエンテーションの満足度

海外留学経験がある教員とトラベルコンサルタントによる海外渡航時の注意点とマレーシアの基本情報を提供したオリエンテーションは、8名が「非常に役立った」、6名が「役立った」、1名が「どちらでもない」と回答した。教員との事前面談は、5名が「非常に役立った」、9名が「役立った」、1名が「どちらでもない」と回答した。適宜実施した情報提供や質問への対応は、9名が「非常に役立った」、6名が「役立った」と回答した。

## 7. 次年度の研修に対する提案や意見

「患者に実施されているケアを実際に見てみたい」「現地の学生と過ごす時間がもっと欲しい」「英語のリスニングと英単語の暗記を事前にしっかり準備しておくと思えば学びが深まると思う」「バスの移動時間を短くしてほしい」という提案や意見があった。

# VI. 考察

## 1. 参加動機

参加動機は「マレーシアの文化習慣理解」「語学力の向上」「マレーシアの医療看護理解」が上位を占めていたことから、これらを達成できるプログラムを構築し、参加学生を増やす必要がある。その理由は、参加人数が多い方が移動に係る費用の団体割引が適用されるため、研修費用を抑えられるというメリットがあるためである。

また、2018年に内閣府が13歳から29歳に対して実施した調査によると、外国への留学を希望しない者の割合は、韓国や欧米が約30%に対し、日本は50%を超えている（内閣府，2018）。本学学生は約77%が希望しなかったことから、全国平均より高い状況であった。高校生が海外留学したいと思わない理由として、言葉の壁への不安、海外の治安が不安、特に魅力を感じないなどが挙げられてる（文部科学省，2021）。今回は不参加者を対象とした調査は実施していないが、本学学生は、言葉の壁への不安に加え、自身のアルバイトによって生活費を捻出している学生が多いことから、経済的理由から

参加を躊躇する学生も少なくないと推測される。本研修参加者には大学から数万円の補助金が助成されるが、海外渡航が初めての学生が多く、研修費用に加えてパスポートの申請費用やスーツケースの購入費用も必要となる。そのため早期から本研修の内容や費用に関する情報提供を行い、参加を検討している者が研修費用の準備を進められるように支援する必要があると考える。

## 2. 研修成果

### 1) 異文化をもつ人々との交流による学習成果

学生の満足度が高かったプログラムは、静脈注射管理の講義とスポーツ、次いでマレーシアの保健医療に関する講義であった。本調査では、1つの設問に静脈注射管理の講義とスポーツという2つのプログラムを含めて質問したため、それぞれの満足度を個別に把握することはできなかった。しかし、静脈注射管理の講義は学生にとって既習内容であったことから、マーシャ大学の学生と共同で実施したスポーツ活動の方が、より高い満足度につながった可能性が高いと考えられる。同行した教員の観察においても、マーシャ大学学生とともにスポーツに取り組む本学学生の表情や態度は生き生きとしており、積極的に参加している様子が認められた。

学生が本研修によって獲得したと考える力として、「英語でのコミュニケーション力」、「日本人以外との交流力」を獲得したと回答したことに関しては、先行研究の結果（須藤，樋口，2016，麻原他，2018，田中，秋元，2021）と同様であった。これは国際英語論の考え方に基づく「自分の英語（My English）」の確立を支援する姿勢であると考えられる。緊張や恥ずかしさから英語での発話をためらっていた学生が、「自分の英語でよい」と認識することで安心感や解放感が生まれ、実際に英語を使用し始めるようになる。こうした変化が、恥ずかしさや緊張感を乗り越えて積極的に意思疎通を図ろうとする態度につながり、現実的な言語行動の促進につながるとされている（塩澤，2020）。本研修を通して学生は自身の英語力を駆使し、円滑なコミュニケーションを遂行する能力を獲得できたと考えられる。自由回答において、「マレーシア人のホスピタリティや友好的な態度」が最も印象に残ったと回答した学生が多かったことから、マーシャ大学の学生や関係者が、本学学生の未熟な英語力に対して、辛抱強く、寛容に接してくださったことがうかがえる。こうしたマーシャ大学での受容的な環境が学生に安心感を与え、英語による自己表現の促進につながったことは、「英語でのコミュニケーション力」獲得に極めて重要な要素であったと強調しなければならない。したがって、マーシャ大学と本学との協働による国際看護学演習は、学生のコミュニケーション力の向上や異文化理解を促進するために有効であり、今後も両大学の協働関係を継続・発展し、より効果的な教育プログラムの構築を図ることが重要であると考えられる。

### 2) 異国で生活することで獲得した力

本調査によって学生が「仲間と助け合う力」「生き抜く力」「挑戦する力」「自己主張する力」「セルフコントロール（自己制御）する力」を獲得したと回答した点は、先行研究では示されていない点で

あった。参加学生の多くは自宅から通学しており、本研修が初めての海外渡航であった。ホテル内のコインランドリーの使用方法が分からない、部屋の掃除を依頼したが清掃されていなかったなど、大小様々な想定外の事象があった。教員が学生から相談を受けることもあったが、教員は「現地の学生に尋ねてみてはどうか」や、「自分たちで受付に相談してごらん。それでも難しければ再度相談するように」と助言し、学生の自立が促進されるよう支援した。その結果、学生は翻訳アプリを使用して現地学生にコインランドリーの使い方を教えてもらい、使い方を動画にして参加学生全員に共有できたり、清掃が十分でない状況を受け入れるのではなく、自ら受付に赴いて清掃を依頼することを決意し、英語での自己主張に挑戦したりする姿が見られた。その際、1人では英語でのやり取りに太刀打ちできないかもしれないと考え、何名かで挑戦していた。このような経験の積み重ねを経て、仲間と助け合う力や挑戦する力を獲得していったと推測される。さらに、挑戦が成功した、自己主張が通ったという成功体験が自己開示や自己表現を促進させ、「異文化への対応力」や「英語でのコミュニケーション力」獲得を後押ししたと考える。引き続き学生への教員の支援は最低限とし、学生が英語を使う機会を意図的に作り、自ら問題を解決できるような環境を作っていきたい。また、プログラムは早朝から夕方まで終日続き、ホテルでの滞在も2人1部屋であった。そのため、家族以外の他者と長期間一緒に過ごすという経験も、学生は初めてであった。この経験は、日々疲労感が増していく中でも他者への配慮や自身のストレスをマネジメントしていくという、「セルフコントロール（自己制御）する力」の獲得に寄与したと考える。

学生は、初めて親元を離れ2週間仲間とともに異国の地で生活をする環境に身を置いた。この経験を通して、自己主張をしないと後で自分が困る、失敗しても良いから挑戦してみようといった前向きな変化がみられた。阿部（2018）は、現代社会で育った看護学生の特徴として、生活体験の乏しさ、対人関係の希薄さ、想像力の弱さを挙げているが、学生が研修参加によって獲得した様々な力は、現地に身を置いて実際に経験を積み重ねたからこそ獲得できたと確信している。

### 3) 日本との保健医療制度の違いによる学習成果

マレーシアは、日本のような公的医療保険や介護保険は存在しない（経済産業省、2024）。病院は、公的医療機関（国立）と民間医療機関（私立）の2種類があり、公的医療機関は費用の安さから低所得者の患者が多く、民間医療機関は、中・高所得者や外国人の患者が多い。本研修では、マレーシアで最大規模の公的医療機関であるクアラルンプール病院と、各国の要人も受診するプリンスコート病院を視察した。民間医療機関は最新のシステムと医療機器を備え、待ち時間はゼロに等しく、公的医療機関と民間医療機関では、施設の設備、医療サービスの差は歴然であった。このことが、マレーシアの保健医療の講義の満足度の高さや国立病院と私立病院の違いが印象に残った理由であると考えられる。マレーシアは多民族・多宗教国家であり、日本とは全く異なる医療制度であることから、マレーシアを本研修の実施国としたことは、目的達成に大きく寄与していると考えられる。

### 3. 今後の展望

今回の研修では、公的医療機関（国立）と民間医療機関（私立）の両方を視察したが、施設の見学が主で、実際の看護を見学する機会がほとんどなかった。そのため今後は、施設見学のみにとどまらず、短時間でも看護師へのシャドー研修を行いマレーシアの看護を実際に見る機会を得ることが、看護における国際的感覚を向上させるための課題である。また、マレーシアには国民皆保険制度がなく、収入によって受けられる保健医療サービスに格差が生じている。その背景には社会的格差や日本との保健医療制度の違いがある。本研修への参加によってこうした現状を現地で学び、日本の「医療の平等性と医療費増大」という課題と、マレーシアの「最低限の医療保障と医療費抑制」を比較することで、国民の幸福にとって望ましい保健医療政策について考察する契機となることも期待したい。

本研修で最も印象に残ったことに関する自由回答では、「マレーシア人のホスピタリティや友好的な態度」が最も多く挙げられた。この結果から、専門職者としての視野を広げ、看護における国際的感覚を養うという国際看護学演習の目的は一定程度達成されたといえる。しかし、その達成度は十分であったとは言い難い。その背景には、参加学生の英語によるコミュニケーション能力が十分でなかったことや、マレーシアの歴史・宗教・医療制度に関する事前知識が乏しかったことが挙げられる。その結果、興味をもった事柄について知識を深めたり、適切に説明したりすることが困難であった。今後は、事前にマレーシアの医療制度、教育制度、地理、歴史、宗教、マナーなどを十分に学習しておくことで、興味をもつ事柄の増加や、興味をもったことを深く掘り下げて質問するといった行動が可能になると期待できる。

本研究の限界は、対象者数が15名と少なく、研修の成果の包括的な評価に至らず、一般化が難しい点である。しかしながら、15名の本研修参加による学びや成長は著しく、本研究の成果は、看護学生の海外研修を積極的に進めることの意義を社会に発信できる契機となったと考える。今後は、海外研修直後の学生の成長のみでなく、海外研修がその後の生活や臨地実習にどのような影響を与えるのかという長期的な視点での評価を実施することで、研修プログラム構築の一助としたい。

## Ⅶ. 結論

本研究は、今後の看護学生の海外研修のあり方を検討する資料とするために、マレーシアで実施した海外研修の成果と課題についてアンケート調査を実施し明らかにした。学生たちは異文化をもつ人々の交流、異国での生活体験、日本との保健医療制度との比較を通じて「英語でのコミュニケーション力」「仲間と助け合う力」「生き抜く力」「挑戦する力」「自己主張する力」「セルフコントロール（自己制御）する力」「課題探求力」を獲得していた。一方で、本プログラムの課題としては、看護の実際を体感する機会の確保、英語によるコミュニケーション力向上のための支援が挙げられた。

## 謝辞

本研修の受け入れ先であるマーシャ大学の創設者兼元看護学・助産学学部長である Zahrah Saad 教授、マーシャ大学 Centre for Pre-University Studies のスタッフの方々に感謝いたします。

## 文献

- 阿部幸恵：看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入，日本看護協会出版会：6-8，2018
- 麻原きよみ，ハフマン・ジェフリー，井上麻未，永井智子，中島薫，小黒道子... 瓜生田真理：聖路加国際大学海外留学プログラムの特徴と成果-学生の学びと成長に焦点をあてて-，聖路加国際大学紀要，4：18-23，2018
- 外務省：海外安全ホームページ 国・地域情報～マレーシア～〔[https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pchazardspecificinfo\\_2024T119.html#ad-image-0](https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pchazardspecificinfo_2024T119.html#ad-image-0)〕（最終確認：2025年2月20日）
- カルデナス暁東，西頭知子，月野木ルミ，小林貴子：日本私立系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査，大阪医科大学看護研究雑誌，3：147-156，2013
- 経済産業省：医療国際展開カンントリーレポート 新興国等のヘルスケア市場環境に関する基本情報 マレーシア編，2024，〔[chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://healthcare-international.meti.go.jp/files/document/countryreport\\_Malaysia\\_2021.pdf](chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://healthcare-international.meti.go.jp/files/document/countryreport_Malaysia_2021.pdf)〕（最終確認：2025年9月23日）
- 国立研究開発法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター（Center for Research and Development Strategy）：海外調査報告書 ASEAN 諸国の科学技術情勢～マレーシア～，2023，〔<chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.jst.go.jp/crds/pdf/2022/OR/CRDS-FY2022-OR-02.pdf>〕（最終確認：2025年2月20日）
- 厚生労働省：2019年海外情勢報告第5章東南アジア地域にみる厚生労働施策の概要と最近の動向第2節マレーシア〔<chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/20/dl/t5-04.pdf>〕（最終確認：2025年2月20日）
- 文部科学省総合教育政策局国際教育課：令和3年度高等学校等における国際交流等の状況について，2021，〔[chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/koukousei/20250331-mext\\_kyokoku\\_01.pdf](chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/20250331-mext_kyokoku_01.pdf)〕（最終確認：2025年9月23日）
- 内閣府：我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度），2018，〔<http://www3.keizaireport.com/report.php/RID/437397/>〕（最終確認：2025年9月23日）
- 内閣官房：教育未来創造会議提言 我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）〈令和4年5月10日〉，〔[chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/pdf/ikkatsu\\_dl.pdf](chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/pdf/ikkatsu_dl.pdf)〕（最終確認：2025年2月20日）
- 塩澤正：「国際英語論」からの日本の英語教育への示唆-Model of "My English" の提案-，アジア英語研究，22：13-56，2020
- 須藤恭子，樋口まち子：国際看護における実習の意義および教育効果の検討．国際保健医療31（4）：333-345，2016
- 田中博子，秋元とし子：国際看護研修（フィリピン大学）で地域看護学実習に参加した学生の学びと成長-都市と地方でフィールドワークを経験して-，創価大学看護学部紀要，6：23-32，2021

付録 1

2024 年度海外研修プログラムの内容

日時	行程	
	午前	午後
9月1日(日)		松山空港発
9月2日(月)	クアラルンプール国際空港着	日常英会話レッスン
9月3日(火)	ウェルカムパーティ、マーシャインターナショナルスクール見学	マーシャ大学内シミュレーションセンター見学 講義：マレーシアのヘルスケアシステム
9月4日(水)	私立クリニック見学(透析センター、リハビリセンター等)	私立マーシャ病院見学
9月5日(木)	講義：静脈注射管理、医療機器の目的と名前合わせクイズ	マーシャ大学キャンパスツアー、マーシャ大学学生とのレクリエーション
9月6日(金)	クアラルンプール市内視察	
9月7日(土)	高齢者施設訪問	
9月8日(日)	自由行動	
9月9日(月)	児童養護施設および住民の自宅訪問	連邦直轄領視察
9月10日(火)	マラッカ(世界遺産)視察	
9月11日(水)	国立クアラルンプール病院見学	私立プリンスコート病院見学
9月12日(木)	講義：リスクマネジメント、テーピング方法	本学学生によるプレゼンテーション
9月13日(金)	クロージングセレモニー	自由行動
9月14日(土)	クアラルンプール国際空港発	松山空港着